SONAR X2 PRODUCER ProChannel 徹底攻略 [後編]

SONAR X2 PRODUCERを使うすべてのユーザーにお勧めの、アナログ・モデリング技術を使ったProChannel。前回に引き続き、今回はより実践的な使用方法やヒントを紹介していきます。楽器ごとに設定例をいくつか紹介していくので、音作りの参考にしてみて下さい。また、人気オーディオ・インターフェイスの最新モデル、STUDIO-CAPTUREも初登場。キャプチャー・シリーズの新たなフラッグシップ機の魅力にも迫ってみましょう。

Product Info.
Roland
SONAR X2
SONAR X2 PRODUCER
■価格：OP（市場予想価格6万円前後）
SONAR X2 STUDIO
■価格：OP（市場予想価格4万円前後）
SONAR X2 ESSENTIAL
■価格：OP（市場予想価格2万円前後）

■ SONAR X2 シリーズ動作条件
●対応 OS：Microsoft® Windows® 7 SP1 以降、Windows® 7 x64 SP1 以降 ※すべて日本語版 ●対応パソコン：Windows® 対応パソコン ●CPU／クロック：Intel® Core TM プロセッサー、互換プロセッサー 2.6GHz 以上 ※クロックが変化するCPUでは、最低動作クロックが上記条件を満たしている必要があります。 ●メモリー：2GB 以上 ※4GB 以上を推奨 ●ディスクの空き容量：50GB（PRODUCER）、30GB（STUDIO）、15GB（ESSENTIAL）以上の空き容量のあるSATA接続のHDDまたはSSD ※HDDの場合は 7,200rpm 以上を推奨 ●画面解像度／色数：1280×800 ドット、High Color（16ビット）以上 ※1920×1080ドット以上を推奨 ●必要なハードウェア：Windows® 対応のオーディオ・インターフェースまたはサウンド・カード ※ASIO対応のハードウェアを推奨／DVD-ROMドライブ（インストールに必要）／CD-R/RWドライブ（CDライティングに必要）●その他：インターネット接続環境

ProChannel FEATURES “PRESET”

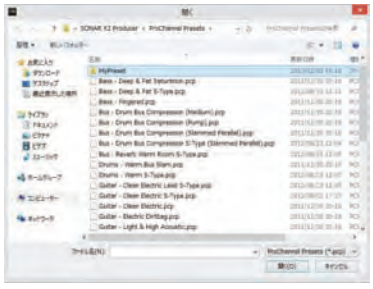
さまざまな楽器に対応した即戦力のサウンド
プリセットを活用しよう！

SONAR X2 PRODUCERの大きな特徴であるProChannelは、「Console Emulator」「EQ」「COMP」「BREVERB」「TUBE」「SATURATION KNOB」「FX Chain」の7つのエフェクト・モジュールから、好きなものを組み合わせてサウンド・メイクしていく「チャンネル・ストリップ」タイプのエフェクトです。使い勝手も良いので、ある程度エフェクターの仕組みや音作りのノウハウがあれば瞬時に好みのサウンドを作ることができるのですが、どんなエフェクトを掛ければ良いかわからない…と悩んでしまうことも。そんなときにはプリセットを活用するのがオススメです。

ProChannelには、各モジュールが組み合わせられた楽器ごとのプリセットが、FatやSmoothなど音色をイメージしやすい名前で収録されています。プリセットを読み込み、好みに合わせて微調整していけば簡単にカッコ良いサウンドが得られるのです。

また、カスタマイズしたProChannelは、オリジナル・プリセットとして保存することもできるので、お気に入りの設定をどんどん保存していけば、ミキシング作業を効率的に行なうことができます。ぜひ活用しましょう。

画面1 コンソール・ビューやインスペクタで、ProChannelプリセットの読み込み／保存が可能。



画面2 楽器ごとに実践的なプリセットを収録。オリジナルのプリセットは、フォルダを作って管理すると便利です。

ProChannel HOW TO USE 01

設定例〜その1
「SessionDrummer 3」のアコースティック・ドラム音色

ここからは、楽器ごとに実際の設定例を紹介していきましょう。まずは曲の土台になるドラム。Session Drummer3のアコースティック・キットで汎用的に使えるオーソドックスな設定です。

ポイントとなるのはFX Chainモジュールにインサートした「PX-64 Percussion Strip」です。SHAPERのDECAYとCOLORで、低域成分の余韻をカットし、全体的にスッキリとしたサウンドを作っています。不要な余韻が無くなることで、リズムがタイトになり、まとまりのあるサウンドを得られます。また、四つ打ち系のキックの場合はWEIGHTを調整することでキックの量感をコントロールすることができるので、さまざまなシーンで活用できるでしょう。

COMPに使用した「PC4K S-Type Bus Compressor」は、サウンドにパンチを与えつつ、まとまったサウンドに仕上げることが可能です。パラメーターを設定するときは、Thresを下げてコンプが激し目に掛かった状態でAttackとReleaseを調整し、Thresを戻してMAKE-UPで音量を上げていくようにすると好みの質感が作りやすいことでしょう。また、Dry/Wetのバランス調節も可能なので、コンプをガッツリ掛けておき、Dryとのミックス・バランスで音を作っていくこともできます。今回は、ドラムのミックス・バスに使用しているため、比較的浅めにコンプレッションを掛けています。

EQはHPで不要な低域を削り、HI MIDを軽くブーストすることでオケに埋もれにくいサウンドを作っています。ドラム・バスでEQを使用する場合はドラムのパーツごとのレベルにも影響してきますので、まずはSession Drummer3内で音量バランスを取ってから、微調整に使用していくと良いでしょう。また、音が

画面4 PX-64のSHAPERで余韻をコントロール！ TS-64でも同様の処理が可能です。

コンパクトなスペースにEQのカーブがグラフィカルに表示され、使い勝手、視認性ともに良好だ。

画面3 ドラムへの使用例

こもって聞こえるような場合はLo MIDをカットしてみてください。思ったサウンドが作れないときは、思い切ってEQカーブを変えてみるのも効果的です。

最後にSATURATION KNOBを掛けていますが、音量が最大のときにLEDが点灯するかしないか程度の軽いサチュレーションに留めています。これだけで音の存在感がグッと増してくるので、特にパート数の少ない楽曲でサウンドがスカスカに聞こえてしまう場合に使うと効果的でしょう。

Session Drummer3にはアンビエンスの掛かった音色も収録されていますが、ルーム感が強過ぎる場合はドライの音色を選択し、BREVERBでROOMタイプのリバーブを加えてアンビエンスを調整するといった工夫も考えられます。

リズム・マシーン系の音色でも基本的には同じような流れで大丈夫です。4つ打ちキックなどガツンと前に出したいときは、深めにコンプを掛けた上でリミッターを併用するなど色々試してみてください。

ProChannel HOW TO USE 02

設定例～その2
エレキ・ベース音色

続いてD-PROやSI-Bass Guitarなどのエレキ・ベース音色での使用例です。

まずConsole Emulatorに加え、TUBEモジュールで軽くチューブ・サチュレーションを掛けています。ベース単体で聞くとサウンドの変化は小さいのですが、オケ全体で鳴らしたときに馴染みつつも音の輪郭がはっきりしてくるようになります。ベース以外でも同じ使い方ができます。

そして、EQを使い低域をコントロールしていきます。どの位補正するかは使用する音源によって違いますが、D-PROの場合は低域が強すぎる傾向にあるので、HPでローカット、Hi MIDを軽くブーストしてベースラインが聞こえやすいように処理を行なっています。ベースはローが大切ですが、出し過ぎると低域がぼやけてしまうので、時には思い切ってカットしてみるのも大切です。

最後に音のアタックを強調するようなセッティングでPC76 U-Type Compressorを使用しています。

音が細かったりライン臭さが目立つような場合は、TH2 Producer（アンプ・シミュレーター）を使うのも効果的です。その場合、アンプはキャビネット部分だけを活かして使ってみてください。TH2の場合、キャビネット・モデルが選べるだけでなくマイク・ポジションも細かく設定できるので、EQでは再現できないような生々しいニュアンスを作り込めます。

画面5　ベースへの使用例。

ProChannel HOW TO USE 03

設定例～その3
エレキ・ギター

エレキ・ギターの場合について考えてみましょう。TH2 PRODUCERなどのアンプ・シミュレーターの精度はかなり高いので、ライン録りもアンプ録りも基本的な音作りの考え方は同じです。

ミックスの前段階…つまりアンプやアンプ・シミュレーターでしっかり好みのサウンドを作っていくことが何より大切です。アンプのつまみはもちろん、キャビネットにマイクを立てる位置でサウンドは激変してしまいますので、ミキシング時に不要なEQを避けるためにもしっかりと音作りしておくことが大切です。ある程度好みの音が作れている場合は、ミキシングも楽。ここで紹介している設定例もPC76 U-Type Compressorで軽く音量を揃え、EQで補正しているだけです。

ギター以外のオケが打ち込みの場合、ギターの音が混ざらず浮いて聞こえるようなケースも多いと思います。その場合はギターやリバーブ、ディレイを深めに掛けたり、ベースでも紹介したサチュレーションを与えてみるなど、色々試してみてください。

プラグインのアンプ・シミュレーターを使う場合は、FX Chainモジュールを使ってシミュレーターもProChannelで管理するようにすれば、音作りの幅はさらに広がってきます。

画面6　エレキ・ギターへの使用例。

ProChannel HOW TO USE 04

設定例～その4
ボーカル

歌モノ楽曲におけるボーカルは、何よりも気を使いたいパートです。

ここでは、女性ボーカルを例にセッティングを作成してみました。まずはEQを使って音質を整えていきます。使用するマイクやボーカリストの声質によっても変わってきますが、ヌケが悪く感じる場合はQを狭めてHIGHを軽くブーストしてみましょう。倍音部分をEQすることで、声が前に出てくるようになります。同時にGLOSSスイッチをONにすれば高域に煌びやかな成分を付加することが可能です。

続いて、FX Chainモジュールで「VX-64 Vocal Strip」をインサートし、DEESSERで耳障りな歯擦音をカット、COMPANDで軽くコンプを掛けています。余談ですが、音量差が大きい部分は事前にV-Vocal上でダイナミクスを整えておくと、コンプの使用量を減らせ、音の変化を最小限に抑えることができます。また、声が細い場合はVX-64のDOUBLERを使い、声に厚みを与えることもできます。

最後にBREVERB 2でプレート・リバーブを足しています。リバーブはセオリー通りSENDバスを使うのも良いですが、BREVERB 2自体がCPU効率が良いのでインサートでもOKではないでしょうか。

男性ボーカルの場合は、他の楽器が持つ帯域とのかぶりが多くなる傾向にあるので、ボーカルの音を作った後でオケをボーカルに合わせて調整していくのがオススメです。また、ボーカルのトラックをコピーし、そのトラックにコンプを深く掛けてボリューム・フェーダーでバランスを取るというのも定番の手法ですが、ProChannelのコンプならばDry/WetツマミでDry同様の処理が可能です。

画面7　ボーカルへの使用例。

ProChannel HOW TO USE 05

設定例～その5
マスターバス

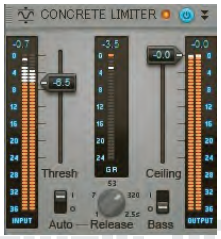
最後はマスターバスです。マスターバスには、大体同じようなセッティングのエフェクトを使うことが多いので、あらかじめプリセットを組んでおけば効率的に作業できるでしょう。

この設定例も非常にシンプル。PC4K S-Type Bus Compressorで最終的なダイナミクスを調整します。アタックは速め、リリース長めで音量が揃うようなセッティングにしておき、FX Chainにマスタリング用のプラグイン・エフェクトをインサートしてみました。

SONAR X2 PRODUCERにはLP64 EQ / Multiband、VC-64 Vintage Channel、Boost11などマスタリング用途で使えるプラグインがあらかじめ揃っているので、プリ・マスタリングまでの作業を完結することができます。

また、音圧を稼ぐには先日オープンしたCakewalk Store Japanで新たに発売されたCONCRETE LIMITTERもオススメ。よりナチュラルなサウンドに仕上げることができます。

画面8
マスターバスへの使用例。



画面9
自然なサウンドが魅力のリミッター、CONCRETE LIMITTERも効果的です。

Cakewalk HEADLINE

NEW PRODUCT SPECIAL REVIEW **CAPUTREシリーズ最新にしてフラッグシップ・モデルが遂に登場!**

STUDIO-CAPTURE の魅力

Rolandのオーディオ・インターフェースと言えば、OCTA-CAPTUREやQUAD-CAPTURE、さらには先日紹介したiPadでも利用可能なDUO-CAPTURE EXなど、手軽ながら本格的なサウンドと、最先端のテクノロジーを組み合わせた総合力の高さで人気となっていますが、STUDIO-CAPTUREはそんなRolandオーディオ・インターフェースの新たなフラッグシップ・モデルとして発売される新製品。

アナログ入出力だけで12基のマイクプリアンプを含む16入力/10出力を備えているほか、OCTA-CAPTUREやQUAD-CAPTUREで人気の機能をさらに進化。使い勝手も大幅に向上させた、フラッグシップにふさわしいスペックを誇ります。

そんな注目のSTUDIO-CAPTUREの魅力、ポイントごとに詳しくチェックしていきましょう。

●オーディオ録音再生チャンネル数：サンプリング周波数（kHz）＝192／96／48／44.1、録音＝16チャンネル、再生＝10チャンネル　●信号処理：PCインターフェース＝24ビット、AD／DAコンバーター＝24ビット　●サンプリング周波数 AD／DAコンバーター＝192kHz、96kHz、48kHz、44.1kHz、DIGITAL（IN／OUT）＝96kHz、48kHz、44.1kHz　●接続端子 INPUT 1～12端子 ※1（XLRタイプ（バランス、ファンタム電源 ※2：DC +48V（無負荷時最大）、10mA（最大負荷））、INPUT 1～16端子（TRS標準タイプ（バランス））、PHONES端子（ステレオ標準タイプ）、OUTPUT 1～8端子（TRS標準タイプ（バランス））、COAXIAL IN端子（RCAピン・タイプ（IEC60958に準拠））、COAXIAL OUT端子（RCAピン・タイプ（IEC60958に準拠））、MIDI（IN、OUT）端子、USB端子（USB Bタイプ）、DC IN端子　●インターフェース：Hi-Speed USB　●電源：ACアダプター　●消費電流：1600mA　●付属品 取扱説明書、Block Diagramチラシ、ACアダプター、STUDIO-CAPTURE Driver CD-ROM、ラック・マウント・アングル×2、USBケーブル、使用許諾契約書、保証書、ローランド ユーザー登録カード

※1　INPUT1～2端子はハイ・インピーダンスに対応　※2　XLRタイプの全入力端子に装備。電流値は1チャンネルあたり。全体で50mA以下であること。

STUDIO-CAPTURE TOPICS 01

サイズを超えた多入出力端子

STUDIO-CAPTUREのまず最初のポイントは、やはり多入出力の端子を装備しているという点でしょう。

本体を見ればわかる通り、コンパクトな筐体にさまざまな入出力端子が所狭しと搭載されているのがわかります。スペックを見ると、16イン10アウトと、数だけ見れば決して珍しいものではありませんが、ポイントはすべてアナログ入出力だけでこの数字を実現できるという点です。

多入出力を謳うモデルでは、ADAT（SMUX）などの端子を備え、外部のデジタル・ミキサーやマイク・プリアンプなどフルで接続して初めて入出力をフルで活用できるケースがほとんど。その場合、一般的なシンセサイザーや音源モジュール、マイクやギターといった楽器類を接続していくためにはオーディオ・インターフェース以外の機材を揃える必要が出てきます。その点、STUDIO-CAPTUREは本体だけで入出力をフルで使用できるのは大きなメリットです。

入出力の内訳を見ていくと、16入力の内、INPUT1～12はXLR/TRSコンボジャック、INPUT13～16チャンネルが-20/-10/+4dBのレベル切り替えが可能なTRSフォン端子となっており、INPUT1～2はHi-Zに対応しているのでギターやベースを直接接続することができます。また、INPUT15/16はコアキシャル（S/PDIF）・タイプのデジタル入力を使用することができるので、デジタル出力が可能なシンセサイザーやアウトボードは音質劣化を気にせず使うことができます。

INPUT1～12にはすべて個別にファンタム電源の供給が可能なプリアンプ「VS PREAMP」が内蔵されているので、マルチ・マイクでの収録に威力を発揮してくれます。多くのオーディオ・インターフェースが搭載するマイク・プリアンプが8系統程度であることを考えると、本体だけで12チャンネルの生ドラムの録音ができるというだけでも大きなアドバンテージになってきます。

出力はTRSバランスが8系統、コアキシャル・デジタルが1系統の系10出力ですが、OUT1-2はXLRタイプのMONITOR OUT端子を装備しているのがポイントとなります。このMONITOR OUTには、本体前面の「MONITOR OUT LEVEL」を通すかどうかを切り替えることができるので、ミキサーやモニター・コントローラーなど常に一定の音量で出力した方が便利な機器との組み合わせもバッチリです。詳しくは後ほど紹介しますが、10系統の出力は細かくルーティングしたり、個別の音量バランスで出力することもできるので、サラウンドでのモニタリングからレコーディング時にはプレイヤーごとに異なるバランスのミックスを作る…などかなり柔軟に対応できるようになっています。

また、ヘッドホン端子は2系統に拡張されているのも見逃せません。個別のボリューム設定が行なえるので、レコーディング時にはプレイヤーとエンジニアが異なるバランスでモニターを行なうことができますし、自宅で複数のヘッドホンを使い分けるのも簡単です。

これだけの入出力を備えながらも、本体サイズはOCTA-CAPTUREと同等のカバンに十分収まるサイズに抑えられています。付属のラック・マウント・キットを使えばラックにマウントすることも可能（2U）ですから、自宅からモバイルまであらゆるユースに活用することができます。

▲画面10　リアパネルには豊富な入出力端子が！

STUDIO-CAPTURE TOPICS 02

徹底した高音質設計

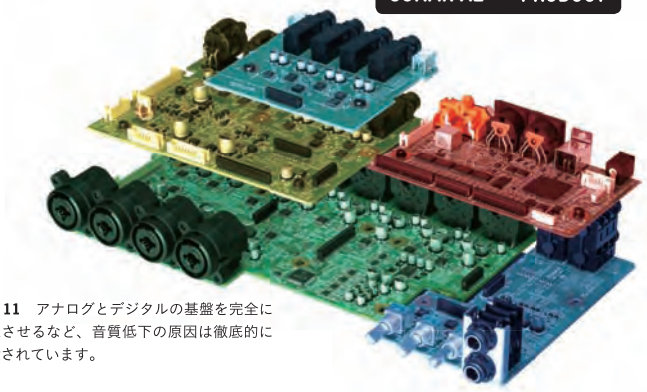
CAPTUREシリーズが人気を得ている理由は、その音質。ワンランク上のモデルに匹敵するクリアなサウンドは、楽器の持つサウンドを忠実にキャプチャーできます。

その秘密は、徹底した高音質設計にあります。まず、マイク・レコーディングでの音質を決定するプリアンプ部には、既にCAPTUREシリーズではお馴染みのVS PREAMPを搭載。しかも電源回路を見直すことでノイズを抑えつつヘッドルームを広げるなど確実なグレード・アップが行なわれています。スペック的には最大入力レベルが全チャンネル＋16dBuと従来モデルよりも大幅に拡大しつつ、入力換算ノイズは-125dBuと、マイク・プリアンプを凌ぐ性能を実現。ヘッドルームが広がることで、ダイナミック・レンジの大きな楽器にも余裕で対応できます。

また、続く回路にもこだわりが。極力シンプルにまとめられたアナログ回路とデジタル回路は別の基盤にされ、電源に至るまで完全に独立させることで、回路間の干渉による音質低下を抑える工夫が施されています。パラメーターのコントロールもすべてデジタル制御が用いられ、音を変化させる要素を極限まで排除。ライン入力やアナログ出力でもクリアな

サウンドを実現しているのです。

さらにはINPUT1～12にはコンプレッサーを内蔵。しかも、同社の業務用機器のV-Mixerに搭載されているコンプレッサーのアルゴリズムを継承した本格仕様。一般的なコンプのフル・パラメーターを搭載しているのでレコーディング時にリミッター的に使うのはもちろん、積極的なサウンド・メイクも行なえます。しかも新たにパラメーターのプリセットを収録（ユーザープリセットも可能）し、実践的なサウンドを瞬時に呼び出すことができます。



画面11　アナログとデジタルの基盤を完全に独立させるなど、音質低下の原因は徹底的に排除されています。

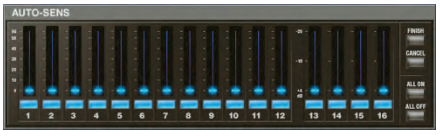
STUDIO-CAPTURE TOPICS 03

Rolandだけの独自機能

サウンドの良さはもちろん、Rolandの最新テクノロジーによる使い勝手の良さや安定して使用できる安心感もSTUDIO-CAPTUREの魅力です。

AUTO-SENSは、16チャンネルのインプット・レベルを自動で設定してくれる機能。AUTO-SENSをONにして、レコーディングしたい楽器を演奏すれば音量レベルを検出し、最適なレベルに自動調整してくれます。これはレコーディング時に起こりがちなレベル設定のミスを未然に防げるのはもちろん、レベル設定の手間を省き、演奏に集中することができるといったメリットがあります。

また、CPUベースのDAWシステムでは逃れられないレイテンシーの問題を解決してくれるのがVS STREAMING。独自設計のカスタム・チップの採用と自社開発のドライバーにより、低レイテンシー時での安定性がさらに向上して、プラグインを多用する制作でも快適な制作環境を実現しています。



画面12　16チャンネルの入力ゲインを瞬時に設定可能な、AUTO-SENS機能。

STUDIO-CAPTURE TOPICS 04

ストレスを感じさせない操作性

多機能なオーディオ・インターフェースで問題になるのが、操作性ではないでしょうか。STUDIO-CAPTUREでは、欲しいパラメーターに瞬時にアクセスできるように工夫されています。

本体には全入力チャンネルのレベル・メーターを装備し、直感的にレベルを把握することができますし、レンジ・セレクトという新たな機能を採用しています。これは複数チャンネルのパラメーターを一括操作できる機能で、例えば1～6チャンネルのファンタム電源をONにしたい！という場合。INPUT1とINPUT8のチャンネル・ボタンを同時に押し、ファンタム電源をONにするだけ。チャンネル毎に個別の操作をする必要がありません。また、新たにコンプレッサーのパラメーター専用のつまみが搭載されているので本体でも快適なオペレーションが可能です。

そしてコントロール・パネルのデザインも一新。プリアンプのコントロールはもちろん、コンプレッサーはグラフィカルな専用エディターを搭載し、掛かり具合を視覚的に確認することができます。

モニターミキサーコントロール画面では4系統のDSPミキサーを利用可能です。本体への入力とDAWソフトからの信号、合計26系統を自在にミックス。パッチベイで出力端子にアサインする…など本格的なモニターミックスを作成可能です。複数のモニタースピーカーを切り替えて使いたい…というケースにもバッチリです。

画面13～15　コントロール・パネルも一新。コンプ専用のウィンドウを装備しました。さらに、Windows 8にいち早く最適化して、10点タッチにも対応、使い勝手においても大幅な進化を遂げています。

STUDIO-CAPTURE TOPICS 05

さらなる拡張への対応

16イン/10アウトあれば十分足りるケースがほとんどだと思いますが、たくさんの音源/楽器やアウトボードを所有している場合や、ドラムだけでなくバンド全体で一発録りしたいなど、もっと入出力に余裕を持たせたいという場合もあるでしょう。そんなときはVS EXPANDを使うことでSTUDIO-CAPTUREを2台同時使用することも可能です。

その場合、アナログだけで32イン/18アウトというレコーディング・スタジオに匹敵する環境を安価で手に入れられるのも魅力です。2台のSTUDIO-CAPTUREをコアキシャル・デジタルで接続するだけで、DAWソフトからは1台のオーディオ・インターフェースとして認識されるので複雑な設定も不要です。

徹底した高音質設計で多入出力、実用的な機能、拡張性まで兼ね備えたSTUDIO-CAPTUREは、DAWベースの制作環境をレベル・アップさせたい人に最適なモデルと言えます。ドライバーの安定性にも定評のあるRolandですから、長いスパンで安心して使えること間違いなしです。

画面16　STUDIO-CAPTUREは2台の同時使用にも対応。最大32イン18アウトを実現！

STUDIO-CAPTUREはこんな人に最適！

- ハイクオリティで使い勝手の良いオーディオ・インターフェースがほしい！
- たくさんの楽器を繋げる、ミキサーレスでシンプルなシステムがほしい！
- 本格的なバンド・レコーディングを行ないたい！
- ライブ配信に使える高機能な機材がほしい！

Cakewalk HEADLINE